【翻譯練習作品】

譯者　周宜秀

放課後

東野圭吾

講談社文庫

第六章の１

【原文】

九月二十五日、水曜日、七時に起床。

眠れない日が続く。まして昨夜は例の事件があったせいで、とても神経を休めるどころではなかった。

陽子のバイクで、車に襲われた現場に戻った私は、彼女を帰宅させるとすぐに近くの公衆電話でｓ警察に連絡した。十分ほど大谷たちがかけつけてきて、現場検証および事情聴取ということになった。

私は陽子とのことは話さず、したがって追跡劇のこともふせたままで、あとはありのままを述べた。彼女のことを喋れば、当然何故彼女がそこに居合せたかを追求するだろうからだ。そうなると狂言強姦のこともいわなければならなくなる。それにこれ以上彼女を今回の事件に巻き込みたくないという気持ちも働いた。

襲われてから通報するまでに四十分近くかかっているようだがと大谷は訊いた。それに対して私は、車を追跡しようとタクシーをひろったが、その時点ですでに見失っており、あてもなく走り回っている、うちにむだに時間を貴してしまったと答えた。少し苦しいかなと思ったが、大谷は疑っているふうでもなかった。それより私の回りに見張りをつけていなかったことをしきりに悔しがっていた。

【訳文】

9月25日，星期三，7點鐘起床。

連日失眠的情況依舊，更甭說昨夜發生的事情，讓人無法放鬆精神。

回到陽子的腳踏車被撞的事故現場後，我讓陽子先回家，隨即用附近的公共電話聯絡了S警局。約莫10分鐘，大谷一行人趕到後，便開始現場搜證並打聽事件經過。

我沒有提及與陽子的事，和那之後高潮迭起的跟蹤過程。除此之外，就如事情的原貌陳述。倘若提起她，必然被追問她在現場的原因。如此一來，也就不得不說出造假強姦的事。況且，我心裡著實不願讓她再卷入這次的事件中。

大谷也有疑慮為何從被襲擊到通報花了40分鐘，我回答，為了追蹤肇事車輛，雖攔了計程車，但卻跟丟，所以無端浪費許多時間四處搜尋。對此大谷雖些許懊惱，但卻也不見有所懷疑的樣子。倒是對沒派人在我周圍盯哨，有些後悔。

【原文】

現場には特にこれといったものはみつからなかったようだが、車のタイヤ跡は分かるかもしれないと大谷は言った。だがそれ以上に、赤っぽいセリカ・ダブルエックスだったという私の証言が、大きな収穫だったはずだ。

大谷は、「焦って犯人もつまらんシッポを出したものですな」と余裕のある態度をみせていた。

本当にこれで真犯人が見つかってくれればありがたいのだが。

実は私の神経を高ぶらせている原因がもう一つある。それは例の高原陽子が言った言葉だ。

「犯人は男性用入口から出て行った。」

この証言は重大な意味を持っている。何故なら、今まで犯人は更衣室内の隔壁を乗り越えて、女性用出入口から脱出したと考えられていたからだ。合鍵の可能性も、北条雅美が考え出した密室トリックも、全てこの前提条件の下にあった。従ってこの前提が崩れた今、これらの推理は全て根底から覆されてしまう。

では犯人は一体どうやって心張り棒をかませたのか？村橋自身がかませたとは考え難い。何故なら陽子の話によると、犯人が出て行ったのは村橋のうめき声が止まんでからだったらしいからである。おそらく犯人は村橋が事切れるのを確認してから立ち去ったのだろう。

【訳文】

現場沒找到關鍵的證物，但是大谷說，從車子留下的胎痕，或許能有所發現。此外，更大的收獲是從我的證言中，得知肇事車是台紅色豐田CelicaXX。

「看來犯人情急之下漏出馬腳了呀！」大谷態度從容地說。

若真能這樣就抓到犯人就好了。

其實，讓我神經愈發緊繃的原因還有一個。那就是高原陽子曾說過的話。

「兇手是從男性用出入口離開的。」

這個證詞的意義重大。目前為止，犯人被認為是從更衣室內爬牆，從隔壁的女性用出入口逃脫的。雖然有使用備用鑰匙的可能性，然而，包含北條雅美所提及的密室手法的推論，都以自女性用出入口逃脫為前提推理而成。因此，現在這個前提條件被否認，其衍生的推理就全都被推翻了。

那犯人到底是如何插上鎖錠並上鎖的？很難想像村橋自己能上鎖。因為從陽子的話來看，兇嫌似乎是在村橋的呻吟聲停止後才離開。恐怕是確認村橋已經斷氣後，才離開現場的。

【原文】

そうなると何らかの細工を外側から施したとしか考えられないわけだが、大谷刑事が言っていたように、あの心張り棒を外側からかませようとすることは、どうしても不可能なのである。

犯人は不可能を可能にした。それは一体どういう方法だったのだ？

実はこのこともまだ大谷は話していない。陽子のことを伏せたままで何とか上手く説明できないものかと考えているところなのだった。

私が何度も朝食の箸を止めるからだろう、裕美子は滅入ったように言った。

いつもより早く学校に着くと、私は真っ直ぐに更衣室に行った。ここ二週間近く使用されていない屋舎は、元の物置に戻ったような薄汚れて見えた。

私は慎重な手つきで、男性用出入口の戸を開けると、ゆっくりした動作で中に入った。カビ臭い空気が鼻をつく。私の動きで近くの埃が舞い上がるような気さえした。

【訳文】

倘若如此，就不得不懷疑犯人可能用不明的小工具，由外側上鎖的方向來考量。如同大谷刑警所說，要讓鎖錠從外面上鎖的可能性微乎其微。

兇嫌扭轉了這個可能性。到底如何做到的？

這事還未向大谷提起。我還在思索，該如何告訴他，又能夠不提及陽子。

「昨天開始心裡就有事吧」

早餐時，可能是好幾次停下筷子的原因吧，裕美子似乎不太高興。

我沒向裕美子提到昨天的事，怕她擔心。但表情卻漏了餡，裕美子好幾次都追問「發生了什麼事」。

「沒什麼」今早這麼回答後，就早早放下筷子，出門了。

我比平常早到學校，真接踏進更衣室。近兩週來無人使用的屋舍，看來像回歸舊日般，沾上了薄薄的灰塵。

我謹慎地伸手，打開了男性用出入口的門，緩慢地移身進去。空氣中的霉味衝鼻而來，我感覺到周遭的塵埃似乎因我的闖入，被微微地捲起，輕輕地飄揚了起來。

【原文】

部屋の中央に立ってまわりを見直してみる。換気孔、ロッカー、女性側との隔壁、そして出入口…これらを使って何とか仕掛が作れないか。しかもそれは大掛かりすぎてはいけない。短時間に実行できて、しかも形跡を残さないような方法でなくてはならない。

「そんな方法…あるわけがない」

私は一人そう呟いてみた。思わずそう言いたくなるほど、この謎の壁は厚い。

一時限目は三年C組。

昨日、今日と生徒達の私を見る目が今までと違っているところに気付いている。どういう種類の視線かは一言では言合せない。関心を持っているようだが、好奇の目とも違うようだ。彼女達は、狙われたのは竹井ではなく私だと知っている。彼女達の上目使いの視線は、私が一体どういう憎しみを犯人からうけているのかを想像し楽しんでいる目だと思う。針の莚に座らされているような気分を味わいながら、私は授業を進めていった。お互いが気持ちを張り詰めているせいか、こういう日のほうがスムーズに進む。皮肉なものだ。

【訳文】

我站在房間中央，再度檢視了周遭。換氣孔、儲物櫃、女性更衣室側的隔板、以及出入口…這些東西，有沒有可能設置機關。不是那種需大費周張的裝置，而是短時間內即可完成，且不留下任何痕跡的方法。

「怎麼可能會有不留痕跡的方法…」

我喃喃自語。幾近脫口而出似的，如謎霧般伸手不見五指。

第一堂課在三年C班。

我察覺到學生們昨天和今天看我的目光，有些不同。至於是哪種目光，我也無法一語道盡。看來像是抱著關心，卻又與好奇不太相同。我知道女孩們所在意的對象並非竹井，而是我。他們抬眼看我的眼神，倒像是在竊喜地想像著，到底為何我會被兇手盯上。舔嚐著如座針氈的滋味，邊為她們上課。或許雙方都揪著緊繃的情緒，反而讓課程得以毫無阻礙地進行。真是諷刺啊。

【原文】

練習問題を前に出てやらせる。出席簿を見て、私は顔を上げた。

「高原、やってくれ」

はい、とややハスキーな声で返事して陽子は立ち上がった。ノートを持って真っ直ぐに黒板に歩み寄る。私の方を一瞥もしないのが彼女らしい。

白いブラウスに紺のスカートの後ろ姿を見ていると、平凡な一女子高生としか映らない。ライダースーツを着て夜のハイウエイを疾走するとはとても信じられないだろう。

昨日、ショッキングな事実を彼女から聞かされた私は、心が落ち着いてから改めてい彼女に訊いた。

「それにしても、どうして今頃になって話してくれる気になったんだ？今まで君は俺のことを避けてばかりいたのに」

陽子はこの質問に答えにくそうに顔をそむけた。だがすぐに抑揚のない声で話始めた。

「そう意味のあることだとは思わなかったのよ。だけど、雅美が密室トリックを推理して、刑事や先生なんかもその推理に同意するのを見て、隠してちゃまずいかなって思ったわけ。でも雅美の間違った推理であたしのアリバイも成立したし、村橋を殺した犯人なんか捕まらなくてもいいって気がしてた」

でも、と彼女は髪をかき上げた。

【訳文】

我把練習題出在黑板上。看過出席簿後，我抬起頭。

「高原，妳來」

好的，陽子用略啞的嗓子回應站起來。帶著筆記本直直地走向黑板。對我不瞥一眼的態度倒也頗像她的作風。

看著那白色上衣搭配著深藍色裙子的背影，只見一介平凡無奇的女高中生。難以想像穿著車衣的她，在夜晚的公路上飆速的樣子

昨天從她口中聽到那驚訝的事實後，我平靜下來，再度問她。

「為什麼到現在才想和我討論？妳不是一直在躲著我」

陽子面有難色地看著我，但隨即用毫無抑揚頓挫的聲調開始說。

「沒特別的原因。看到刑警和老師都對雅美的密室推理如此贊同，我只想，若隱瞞下去不太好。但是，因為雅美錯誤的推理，反而確立了我的不在場證明，便覺得就算逮不到殺了村橋的兇手，應該也沒關係」

她抓揚了下頭髮。

【原文】

「前島先生が狙われたのを知って不安になったんだ。このままあたしが本当のことを言わなければ、ずっと犯人は捕まらなくて、いつか本当に先生が殺されるときが来るんじゃないかって」

私は言葉に詰まった。何が「しかし」なのか自分でも分からない。

「先生を避けてたのは本当よ。だって先生はあたしを助けてくれなかったもん。あの日、一緒に信州に行ってくれなかったもん。あの日あたしどんな思いで駅で待ち続けてたか先生に分かる？分かるわけないよね。だって先生にとっては、あたしなんかただのガキだもの」

川に向かって叫ぶように陽子は言った。彼女の一言一言が針のように私の心を突き刺す。その痛みに耐えかねて、「すまなかあった」と不様な呻き声を漏らした。

「だけど、やっぱりだめだね」

陽子の口調が急に穏やかになった。私は、はっとしてその横顔を見る。

「先生が殺されるかもしれないと思うと、いてもたってもいられなくなって…格好悪いってことは分かってるんだけど走り出してた。バカみたい…だね。

私はうつむき、自分が彼女にかけるべき最良の言葉を探した。だが結局それは見つからず、沈黙の中に身を任せているだけだった。

【訳文】

「前島老師被兇手盯上，讓我覺得很不安。再這麼下去，若不說出實情，兇手不被逮捕的話，說不定老師真有被殺的一天」

我說不出話來，卻也無法辯駁。

「我一直閃躲老師，是因為你不肯幫忙嘛。那天，你沒有和我一起去信州。你知道我是以什麼心情，一直在車站枯等嗎？不知道吧。我在老師的眼中，充其量只是個小孩。

陽子像是對河大吼般地說。她說的一字一句像針般地刺進我的心。我忍住心痛，嘴邊不爭氣地的呻吟著說「對不起」。

「但是，我不能這樣做」

陽子的語氣突然變得平穩。我有些驚訝地望向她的側臉。

「只要想到老師有可能遭到毒手，我就坐立不安…我知道很沒面子，但還是得說出來。我真像笨蛋…」

我低著頭，試著找出合宜的話。然而最後還是一句話都說不出來，只能任自己處在沉默之中。

【原文】

授業が終わった後、松崎に呼ばれて、警察が職員の自家用車を調べているようだが何か知らないかと訊かれた。面倒なので知らないと答えておいたが、早速捜査を始めたらしいなと、内心気持ちが張りつめる思いだった。

休憩時間に、廊下でケイと逢った。練習ができなくて残念と、珍しく不機嫌な顔を隠そうとしない。

「おまけにそこら中に目つきの悪いのがウロウロしてるし、学校に来るのが嫌になっちゃう」

刑事のことだ。昨夜の車を追う連中も居るが、ピエロ事件の手がかりをか探して、まだ何人かの刑事が校庭中を調べ回っている。

「事件解決までの辛抱だ。がまんしてくれよ」

そう言ってみたが、自分の声も冴えない。事件解決—本当にそんな時がくるのだろうか？

【訳文】

下課後，松崎被叫去問話。警察似乎正在調查職員的自用車，並且被詢問是否知道些什麼。我覺得厭煩，推說一無所知，但心裡卻緊張於調查展開地竟如此迅速。

休息時間在走廊遇到K。他難得地毫不掩飾自已因無法練習而不高興的臉。

「多虧你，那些面露兇惡的人在這邊兜來轉去，都不想來學校了」

他指得是刑警。昨晚追車的人也在場，正在搜尋小丑事件的線索，另有幾位刑警在校園內四處查看。

「事件解決前，再忍忍吧」

雖這麼說，但連我也不禁懷疑。真相大白的一天會來到嗎？

【原文】

九月二十六日、木曜日。

麻生恭子が逮捕されたという噂を聞いたのは、出勤して職員室に向かう途中だった。一人の生徒が、「大ニュース、大ニュース」とか言ってまくし立てているのが聞こえてきたのだ。

私は急ぎ足で職員室に行った。ガラリと戸を開ける。その瞬間、あの噂がデマではないことを悟った。

部屋の雰囲気はひどく湿っぽくが重苦しかった。その空気は私が現れたことで更に緊張したようだ。全員が顔を伏せ、空しく机に向かってる。私が席に向かう間、誰一人声を出そうとしない。

だが私が席に着こうとした時、重苦しい空気を破るように、藤本のやけにはっきりした声が響いた。

「前島先生、噂を聞きましたか？」

まわりに座っていた何人かが、びくりと身体を動かしたようだ。私は藤本の方を見た。

「ついさっき、廊下で…生徒が話していた」

「なるほど、さすがに連中は早耳ですね」

彼は苦笑を浮かべたようだ。

「逮捕…って、その生徒は言っていたけれど」

「いや逮捕ではないです。参考人として出頭しただけです。」

【訳文】

9月26日 星期四

前往職員室的途中，麻生恭子被逮捕的小道消息，傳入耳中。聽到某個學生連珠炮似地唸著「大消息、大消息」。

我快步趕往教員室。咻地打開門。那一瞬間，便了然傳聞並非無中生有。

房間內的氣氛如同濕氣般凝重，空氣似乎因我的出現更加緊張起來。所有人都低著頭，面朝著張空無一物的桌子。我朝坐位走去時，也沒有一個人出聲。

然而，在快走到座位時，藤本用絕望的聲音，劃破了那凝結的空氣。

「前島先生，你聽到傳聞了嗎？」

「剛剛在走廊上…聽學生說的」

「原來如此，這幫人消息果然靈通」

他臉上浮現出苦笑。

「逮捕…那個學生是這樣說的」

「不，應該不是逮捕。只是以關係人身份配合調查。」

【原文】

「でも…」

と横から堀教諭が口をはさんだ。「実質的には逮捕みたいなものでしょう？」

「いや、それは言いすぎでしょう」

「そうかしら」

「ちょっと待って」

私は藤本の所まで行くと「もう少し詳しく話してもらえないかな」と言った。

藤本の話によると、今朝早くS警察の大谷から電話があって、麻生教諭に参考人として出頭してもらっているという旨を伝えられたらしい。その時に電話を受けたのは松崎だが、驚いて大声で受け答えしてしまったために、居合せた生徒にまで気取られたということだった。

「何故急にそんなことになったのかは不明です。それで僕たち、勝手な想像をしていたわけですけど」

藤本がそういう言い方をしたので、堀教諭は首をすくめる仕草をしてみせた。

「しかし……やはり彼女だったんですかね、犯人は」

長谷も椅子を回して、こちらの方を向いた。

「前島先生、何か心当たりがあるんでしょう？」と堀教諭。私が何も答えずにいると、小田教諭が自分の席でお茶をすすりながら言った。

【訳文】

「但是…」

在旁的堀老師插話說，「實際上，就如同被逮捕，不是嗎？」

「不，這有些言過其實」

「是嗎」

「等一下」

我移身到藤本身邊，「再仔細跟我說說」，我說。

據藤本所言，今天一早S警局的大谷打電話來，傳達了讓麻生老師以關係人身份接受調查的事。當時接電話的松崎，驚訝之餘不由得大聲起來，才讓剛好在場的學生都注意到。

「還不知怎麼回事。我們也只是胡亂猜測而已」

聽藤本這麼說，堀老師縮了縮頭。

「但兇手…應該是她，對吧」

長谷也把椅子轉朝這個方向。

「前島老師，你應是知道些什麼吧？」堀老師說。我答不上來，小田老師則在座位邊倒茶，邊說：

【原文】

「前島さんにはなくとも、向かうにはあるのかもしれませんな。何といっても女という動物は執念深いですからねえ」

「あら、男の人にも結構そういう人は多いですわよ」

堀教諭がそう言った時、戸が開いて松崎が入ってきた。やつれたように見える程、弱りきった表情。足元もたよりなげだ。

チャイムが鳴ったが朝礼を行う様子はなかった。皆を集めて何を言えばいいのかも、今の松崎には分らないのだろう。栗原校長も校長室にこもったきりだ。おそら苦しい顔つきで、何本も煙草をふかしているに違いなかった。

授業に出たが生徒達の反応は教師達と大分違っていた。非常に明るくて、私の話を楽しみにしている様子なのだ。しかも麻生恭子と私を結び付けて、何か彼女達好みの想像を勝手に楽しんでいるようだった。

私自身はと言えば、全くうわの空で喋っているという感じだった。大谷刑事はその執念と嗅覚で一体何をつかみ、麻生恭子に出頭を命じるに至ったのか。彼女は第一の事件では完全なアリバイがある。それを大谷はどうとらえているのか。そして先日彼女が言った「真相は全く別のところにある」という言葉。それらの事が目まぐるしく頭の中を廻り、とても授業どころではなかった。

【訳文】

「就算前島老師不知道，對方說不定另有算盤呢。再怎麼說，女人可是相當執拗的動物啊。」

「唉喲、這種男人也不少呀」

堀老師說話的同時，松崎開門進來。一副氣力耗盡、憔悴的表情。腳步顯出不安的樣子。

鐘響，但朝會卻沒有要召開的模樣。松崎現在應該是對集合後該說什麼，沒有頭緒。就連栗原校長也閉悶在校長室裡頭。恐怕也是苦著張臉、一根接著一根地抽著煙吧。

雖到課堂上，學生們的反應卻和老師們大不相同。滿臉興致勃勃地期待我的發言。更不用說因我與麻生恭子的關係，女孩們彷彿更樂得沉浸在各自的想像之中。

而我自已，同樣也是一頭霧水、丈八金剛摸不著腦袋。大谷刑警的執著到底讓他嗅到什麼，又抓住什麼線索，才能讓麻生恭子配合調查？麻生在第一次的事件中有明確的不在場證明。大谷是如何尋到線索呢？而且，先前她說「真相不是你所想的那樣」這句話。所有的事情不斷地在我腦中徘徊纏繞著，根本無法專心上課。

【原文】

この授業を終えた後、私はそれとなく松崎に麻生恭子のことを尋ねてみた。彼はちょっと嫌な顔をして話してくれたが、大筋については藤本が言っていた以上には知らないようだった。

心に引っ掛かりを残したまま二時限目、三時限目と過ぎていく。

そして四時限目の授業中、小田教諭が私を呼びに来た。刑事が来たので、と耳打ちされる。私は生徒達に自習を命じて教室を飛び出した。いつもなら生徒たちの歓声が背中に聞こえるはずだが、今日は違った。ざわっ、と全員が内緒話を始めたような、妙などよめきが起きっていた。

グレーの背広にノータイという、私に言わせれば典型的な刑事スタイルの大谷が頭を下げた。そしてもう一人、若い刑事。

大谷の目は充血していた。そして顔は脂ぎっている。麻生恭子という容疑者を得て、捜査が盛り上がってきたというところなのだろうか。

「麻生先生に出頭していただいていることはご存知ですな」

「知っています」

私は頷いたいた。「もしかしたら、一昨日の私が車で襲われた事件に関連しているのかもしれないと想像しているのですが…」

【訳文】

這堂課結束後，我迫不及待地向松崎問了麻生恭子的事。他雖回話卻顯得有些不耐，大抵上除了藤本先前說過的之外，也沒有其他的消息。

就這樣滿腹疑惑地過了第二節、第三節課。

到了第四節上課中，小田老師來叫我。悄悄地在我耳邊說刑警來了。我下令學生們自習，自己則飛奔出教室。若是在平常，身後肯定會傳來學生的歡呼聲，然而今天卻不同。所有人彷彿開始竊竊私語，異常地騷動了起來。

在接待室中，不知是第幾次和大谷見面了？

「上課中真抱歉」

灰色西裝外套沒繫領帶，這種裝束在我看來，完全就是典型的刑警模樣。這般穿著的大谷正低著頭。另外還來了一個年輕刑警。

大谷眼睛充血，臉泛油光。有了麻生恭子這個嫌疑犯，看來搜查工作應該正進行的如火如荼吧。

「麻生先生正在配合調查這件事，你知道嗎？」

「知道」

我點點頭。「我在想，說不定這和我的車前天被襲擊的事有關」

【原文】

「いや、それは違います」

大谷はかぶりを振った。私は驚いた。

「違う？」

「はい、麻生先生に出頭していただいたのは全く別の理由からです」

「ではどういう…」

「まあ、待ってください」

私の気負うを外すように、大谷はゆっくりした動作でポケットから手帳と取り出した。頁をめくる手も落ち着いている。

「昨日、うちの若い刑事が学校の焼却炉からちょっとした物を見つけましてね。他でもありません。手袋ですよ。白い木綿の手袋」

焼却炉は捜査のためということで、体育祭以後一度も火を点けられていない。そう言われれば昨日も刑事がひっかきまわしていたように思う。

「この手袋に目をつけたのはその刑事の手柄でした。実はこれには少量の絵の具が付着していたのです」

「絵の具？」

私は記憶をさぐった。今回の事件で絵の具に関する何かがあっただろうか。だが大谷は事も無げに言った。

【訳文】

「不對」

大谷搖搖頭。我驚了一下。

「不對？」

「嗯。麻生先生完全是因為別的理由，才來配合偵查的」

「那…是何原因…」

「哎…等一等」

我的好奇心彷如快被澆熄一般，大谷慢條斯理地從口袋拿出了筆記本。翻頁的手停了下來。

「昨天，我們的年輕刑警從焚化爐裡找到些東西。不是別的，是手套唷。白色的綿手套」

那焚化爐自從體育祭以來，因為搜查的關係，再沒被點燃過。這麼說來，刑警昨天也在學校裡四處徘徊翻找。

「多虧那刑警注意到這手套。我們查出了微量的顏料」

「顏料？」

我試著回想。這次的事件和顏料有什麼關連？ 但大谷若無其事地說。

【原文】

「お忘れですか。例の手品箱を」

言われるのと思い出すのがほぼ同時だった。そうだ、そういえばあの手品箱は絵の具で着色してあった。

「でも、それが犯人のものだとは限らないでしょう」

私は反論した。「XXXX の白い手袋と言えば、おそらく体育祭の応援合戦で使用したものだとおもうのですよ。だからそれに参加した生徒が何かの時に手品箱に触ったのかもしれない」

だが大谷は私の話の途中から首を振り始めていた。

「その手袋を詳しく調べたところ、内側にも赤い塗料のようなものが乾燥した状態で検出されたのです。ごく少量ですがね。なんだかお分かりですか？」

「赤い塗料…」

私は、はっとした。

「そうです、マニキュアですよ。こうなると生徒のものではないということになる。もっとも最近は生徒さんでも多少の化粧品をするひとがいるらしいですがね。しかしまあ、赤いマニキュアは無いでしょう」

「それで麻生先生を」

【訳文】

「您忘了嗎？那個魔術箱呀」

一瞬間我想起。啊，那個魔術箱用顏料上過色。

「但，這不見得表示箱子是嫌犯的東西呀」我反駁他。

「我想白色手套也可能是在體育祭時，玩補給賽時使用的。當時參賽的學生無意間碰到了魔術箱也說不定。」

當我說到一半，大谷卻也開始搖頭。

「我們調查那個手套，發現內側也有類似紅色塗料乾掉的痕跡。極其微量。您可知是什麼？」

「紅色的塗料…」

我猛然想起。

「啊。是指甲油。這樣的話，應該不會是學生的東西。雖說近來多多少少有學生會化妝，但…塗紅色指甲油的嘛，應該沒有」

「所以說才懷疑麻生老師…」

【原文】

「昨夜のうちに麻生先生が現在使用されているマニキュアをお借りしてきておいたのです。捜査員の話ではその時の彼女の不安そうな顔つきから、この女が本ボシだと確信したということですが…まあそれはいいでしょう。とにかく手袋に残っていたものと比べたところ、ぴたりと一致したという報告がえられましてね。今朝先生をお呼びしたわけです」

大谷がどのように麻生恭子を追求したかは大体察しがつく。まず彼女のあの日の行動を事細かく確認したに違いない。その時の彼女の供述には手品箱に近づいたことなど一言も出てこないだろう。そしてそれを確かめた上で手袋を出したはずだ。絵の具とマニキュア――――絶対にあり得ない矛盾が提出されたわけだ。彼女がこれについてどう弁明したか。

「弁明はされませんでした。観念されたのでしょうな。ある一部を除いて、殆ど全く喋ってくだいました」

麻生恭子が白状した――――私にとっては驚くべき話なのだが、大谷は淡々とした調子で口を動かした。その口調に抑えられて、こちらの気分も盛り上がらない。更に、このような状況になってもまだ大谷は「麻生先生」と呼んでいることも気になった。

「どういうことなのですか」

私は逸る気持ちを抑えながら訊いた。すると大谷はまたいつもの調子で、勿体をつけるように煙草を口に持っていくと、ふうーと大きく乳白色の煙を吐いた。

【訳文】

「昨晚，我們借了麻生老師正在使用的指甲油。探員說，從她那時不安的臉孔，便篤信她就是疑犯…不管如何，報告已經出爐。與手套內殘留的成份一致。今早這才傳喚了麻生老師」

我大概能推敲出大谷是如何尋跡找到麻生恭子的。必然是先徹底地清查了她當天的行動。當時她應該完全沒提起曾接近過那箱子吧。在釐清她的供述後，警方這才拿出了手套。顏料和指甲油——兩個相左的矛盾兜在一起。她如何解釋？

「她沒辯解。該是放棄了吧。除了某一小部份之外，幾乎全盤托出了。」

麻生恭子招認了——對我來說，很是震驚，但大谷卻以淡淡的口吻說。使得我不由得受這氣氛影響，提不上勁來。再者，讓我在意的是，都到這節骨眼，大谷卻還稱呼她為「麻生。先。生」

「這怎麼一回事」

我按耐住澎湃的情緒問道。於是，大谷如一貫的作風，表情嚴肅地以煙就口，呼的一聲，吐出了大大的乳白色煙霧。

【原文】

「一升ビンをすり替えたのは麻生先生、しかし前島先生を殺そうとしたのは全く別の人間だということです」

「そんな…」

馬鹿なという言葉を飲み込んだ。麻生恭子が殺そうとしたのでなければ、彼女は一体何のために一升ビンのすり替えなどをやったのだ？

「犯人に脅されて、というのがあの方の言い分です」

「脅されて？」

私は訊き返した。「彼女がなぜ犯人に脅されねばならんのです」

すると大谷は頭をかきながら「これ以上はあまり喋るわけにはいかんのですが、まあ前島先生にだからお話ししましょう」と前置きした。

「前島先生は以前、麻生先生と村橋先生との間に関係があったのではないかという仮説を述べておられましたね。あの仮説はやはり当たっていたのです。この春あたりからずっと関係が続いていたらしいです」

やはり思った通りだった。

「そして麻生先生が栗原校長の息子さんとの縁談を前に、村橋先生との関係を清算しようとされたことも事実でした。まあこれは想像がつきますがね。ところが村橋先生は承知しなかった。麻生先生は大人の遊びのつもりだったが、村橋先生は本気だったのでしょうな」

【訳文】

「將一公升裝瓶子掉包的是麻生老師，但是要殺前島老師的，卻另有他人」

「怎會…」

我硬把荒謬這兩字吞回去。若麻生恭子沒要殺我，那她為何還要做出掉包瓶子的事？

「依她的說法，是被兇手威脅」

「被威脅？」

我反問。「她為什麼會被兇手威脅？」

大谷搔搔頭，說「接下來的事雖然不能外傳，但因對象是前島老師，就告訴你吧」他話說在前。

「前島老師以前曾推測，麻生老師與村橋老師間的關係吧。這個推測果然是真的。從今年春天開始，兩人似乎一直維持著檯面下的關係」

果真如我所料。

「之後，麻生老師和栗原校長的兒子談及婚嫁前，也被要求斷絕與村橋老師間的關係。這容易理解。但是，村橋老師並不知情。這麻生老師只想玩玩大人間的遊戲，但村橋應該是認真的」

【原文】

Kの時と同じだと私は思った。こうして麻生恭子は様々な男を傷つけたのだろう。

「特に村橋先生は、自分と彼女との関係を裏つける、ある証拠を持っていた。それで麻生先生も彼を何とか説得しないことにはどうしようもなかったという話です」

「何ですか、その『ある証拠』とは？」

「まあ聞いて下さい。村橋先生は常にそれを持ち歩いていたそうです。あの更衣室で毒殺された時も持っていたはずだった。ところが現場からそれらしいものは何一つ発見されていない。コンドームがそれらしいと言えば言えなくもないが、二人の間柄を証明するものとは言いがたいですからね。さて、これはどういうことか？」

「犯人が持ち去ったというわけですか」

私はおそるおそる聞いてみた。すると大谷は大きく頷いた。

「そういうことでしょうな。そして当然のことながら麻生先生はあわてた」

ああ、そう言えば…」

いつだったか藤本が、麻生恭子から妙なことを訊かれたと話していたことがある。たしか村橋の所持品が盗まれていなかったかどうか、という質問だったはずだ。何故彼女がそんなことを訊くのか釈然としなかったのだが、これでようやく納得がいく。

【訳文】

和K那時的狀況如出一轍。麻生恭子就是這樣傷害了不少男人吧。

「尤其是村橋老師，檯面下與她的關係確鑿，而且手裡也握著某樣證據。所以，麻生老師對他也莫可耐何。

「他握有某個證據？」

「哎…讓我說下去。據說村橋老師常物不離身地帶著它。在那更衣室被謀殺時，應該也攜帶著。但現場卻找不到任何相關證據。若說保險套就是那證據也不足為奇，但也不見得就是指證明兩人之間關係的東西。你怎麼想？」

「兇手把它帶走了嗎？」

我怯怯地試問。大谷馬上用力地點頭。

「八九不離十吧。當然，麻生老師也慌張了起來」

「這麼說來…」

忘了是何時，藤本曾被麻生恭子問了奇怪的問題。好像是問村橋的所有物，是否有被偷竊之類的。當時不甚明白為何她要問這事，現在終於恍然大悟。

【原文】

私の話を聞いて、大谷も満足そうに胸を反らした。

「麻生先生の供述の裏付けがまた一つ増えましたな」

さてここまで聞かされれば私にも想像がつく。つまり彼女はそれをタネに犯人から脅されたということなのだろう。そしてその内容が一升ビンをすり替えろという命令だった。

「脅迫状を麻生先生は体育祭の朝、机の引き出しからみつけられたそうです。一升ビンすり替えの手順が細かく記してあって、もし実行しなかった場合は、村橋の死体から見つけ出したものを公表するという脅迫文でしめくくってあります。我々はこれを麻生先生の供述通り彼女の部屋から発見したのですが、ああそうだ、ここにコピーしたものがあります」

そう言いながら大谷は、背広の内ポケットからきれいに折りたたまれた白い紙を取り出してきた。ひろげるとそれは大学ノートくらいの大きさになる。大谷は私の前に置いた。

ミミズが這ったような———という平凡な形容がぴったりな字が紙面にびっしりと書き並べてあった。見た途端に読む気をなくしそうだ。

左手で書いたか、あるいは右手に何重も手袋をはめて書いたかでしょうね。筆跡を隠すための有効な手段です。」

文字群を見て思わず顔をしかめた私に、大谷は説明した。

【訳文】

聽我這麼一說後，大谷似乎滿足地往背後一靠。

「又印證了一項麻生老師的供述了」

講到此，我也能猜測出是什麼了。總而言之，她該是因為這個把柄，而被犯人威脅，並命令她把那1公升裝的瓶子換掉。

「體育祭的早上，她從抽屜裡找到恐嚇信。信裡詳細地記載該怎麼掉包瓶子的流程。若不照做的話，便會公開從村橋身上找到的證據。如麻生老師所述，我們在她房間找到那封信。對了，這兒有影本。」

大谷邊說邊從西裝外套口袋中，掏出一張折得整整齊齊的白紙。攤開後，尺寸約莫大學記事本大小。大谷放在我面前。

字跡如蚯蚓爬行般畸形扭曲，但卻排列得密麻整齊，看到的當下，就令人讀興全無。

「左手寫的。再不然，就是右手戴了層層地手套後寫的。是隱匿字跡相當有用的方法」

我看到這堆字而不由得皺起眉頭。大谷瞧見我的表情後，向我說明。

【原文】

脅迫状には次のように書いてあった。

『これは脅迫状だから人に見せてはいけません。
あなたは今日、ここに命令する通りに行動しなさい。
一、アーチェリー部員の行動から目を離さないこと。彼女達は、予め大道具や小道具を部室から何処かに移動させるはずです。その時に、前島氏の小道具の一つである一升ビンをどこに置くかを知っておくことが目的です。
二、手袋を用意しておきなさい。この手袋を三の行動に移る前に必ず着用しなさい。
三、一年生校舎の一階にある物置に行きなさい。そこに白い紙袋が置いてあります。その中に一升ビンが入っていることを確かめたら、即座に一で調べた場所に行き、一升瓶をすり替えなさい。
四、本物の一升ビンは人目につかないところに捨てればよろしい。ただし紙袋は別の場所に捨てること。

【訳文】

恐嚇信的内容如下。

『這是封恐嚇信，請勿讓他人閱覽。
今天你必須如本信中所命令的行動。
一、監視射箭社團員的行動。她們應會將大小道具從團室移往他處。先了解前島那一公升瓶子，放置何處。
二、準備好手套。進行第三項的行動前，務必配戴手套。
三、到一年級校舍的一樓置物處。那裡放置著白色的紙袋。確認袋中裝有一公升裝的瓶子後，立即到一、的瓶子放置處，用白色袋中的瓶子，將它換掉。
四、將真的瓶子丟棄於不醒目之處即可。但是，紙袋必須棄置他處。

【原文】

五、以上の作業が終わったら、速やかに元の場所に戻りなさい。あなたが気を付けることは、これらの作業を絶対に誰にも見られてはならないということです。無論誰にしゃべってもいけません。もし指示通りに行動しなかった場合には制裁を加えられることになります。制裁とは先日ムラハシの所持品から発見した物を公表することです。参考のため、それのコピーを添付します。あなたの将来や立場を考え、指示に従いなさい。』

「なかなかの曲者ですよ、犯人は」

私が読み終えて顔を上げると、大谷はため息をつきあながら言った。

「一を使って殺人をする。これだと遠隔操作みたいなもので、直接の手掛りが非常に得にくくなるんですよ。一升ビンや紙袋、それからこの脅迫状という手掛りがあることはあるのですが、決定的に犯人に近づくということは期待薄でしょうね」

しかも犯人はかなり知能程度が高い、という印象を私はこの脅迫状から受けていた。誤字脱字が全くない上に、指示も整然としている。

「それで、犯人が村橋先生の所持品から持ち去った物は何だったのですか？もうそろそろ教えてくださってもいいでしょう」

あの麻生恭子が絶対服従せねばならぬ程のものとは何だったのか、私たとえそれが事件と無関係であったとしても知りたかった。

【訳文】

五、以上作業完成後，盡速回到原來的崗位。注意你的行動，絕對不能被任何人看見。當然，也不能告訴任何人。若未依照指示，懲罰將隨之而來。村橋的持有物將會被公開。附上影本供妳參考。

為了妳的未來及立場打算，遵照指示為上策。』

「這犯人不簡單，像個編曲家」

我讀完抬起頭後，大谷嘆口氣說。

「借刀殺人。這種遠距操作的手法，很難直接得到有力的證據。一升裝的瓶子、紙袋以及這封恐嚇信雖是線索，但若說能使我們更接近兇手的話，卻是希望渺茫。況且，從這封恐嚇信內容帶給我的印象，嫌犯的智商頗高。全無錯漏字，指示也條理分明。

「那麼，犯人到底拿走了村橋什麼所有物？ 總該告訴我了吧。

到底讓那麻生恭子屈服，不敢違背的是何物。就算與案件無關，我也很好奇。

【原文】

だが私の期待を裏切って、大谷は首を横に振った。

「実を言うとそれがまだわかっていないのです。最初に言ったでしょ、麻生先生は一部を除いて全て話されたと。その『一部』がそれなのです。脅迫状には『それのコピーを添付した』と記されているのですが、そのコピーは早々に処分したらしいですな」

「しかしそれでは彼女の話を全面的に信じるわけにはいかないでしょう？」

全てが彼女の作り話、という考え方もできなくはないのだ。

「いや、この話信じていいと思っています。と言うのはですね、一昨日の夜、前島先生が車に襲われた時刻に、麻生先生は自分の部屋にいたということが確認されているのですよ」

「ほう…」

「このアリバイは確実ですよ。何しろあの日は我々の仲間がずっと彼女をマークしていましたからね。アリバイと言えば、何度も言うように村橋先生の時にも完璧なアリバイがある。それに偽の脅迫状を前々から用意していたとは考えにくいですからね。」

私は麻生恭子の「真相は別のところにある」という言葉を思い出していた。あれはこういう意味だったのだ。

【訳文】

和我的期望背道而馳地，大谷搖了搖頭。

「老實說，這還是個謎。剛說過，麻生老師除了某一部份的事之外，其他毫無保留地招認了。這『某一部份』指的，就是犯人拿走的東西。恐嚇信中雖寫「附上影本」，但那影本早已被處理掉了」

「如此一來，她說的話就不足盡信，不是嗎」

不能排除，全都是她編出來的謊言。

「我倒認為可以相信。因為，前天晚上，前島老師遇襲的時候，麻生老師被證實就在自己房裡」

「嗯…」

「這個不在場證明已經被證實。因為我們的人老早就在注意她。說到不在場證明，如同先前所說，村橋老師被殺時，她也有完美的不在場證明。很難想像這封恐嚇信是她在那之前偽造的」

我想起她曾說「真相不是所想的那樣」這話。到底是何意思。

【原文】

「と言うわけでですね、実際に動いたのは麻生先生だったが、真犯人は別にいるということになったわけです。そこで前島先生には、もう一度犯人の心当たりを考えていただく必要があるわけです」

私は力なく首を振った。

「その点に関しては全く…もう少し考えてみますが、大谷さん達の調査の方はどうなのですか？」

「いや、捜査は進めているのですがね」

彼もまたこの点については歯切れが悪かった。「とにかく手掛かりは少なくないのですから、全力をあげて追及します。それから前島先生は、今後の行動にはくれぐれも気を付けて下さい。麻生先生が自供したことで犯人は焦っています。近いうちに必ず狙ってくるでしょうから」

気を付けます、と殊勝に頭を下げた。

「ところで…結局麻生先生の罪はどうなるのですか？」

「難しい問題ですね」

大谷は困ったような顔をした。「脅迫されて仕方なくやったことなのだから、情状酌量の余地があると言えなくもない。しかし脅迫状を出した人間が村橋先生を殺した人物と同一だということが明白だった上に、麻生先生にとって前島先生が邪魔な存在だったということは事実です。こうなると解釈の仕方が非常に重要になってくる」

【訳文】

「所以說，實際上動手的是麻生老師，但真兇確另有其人。要請前島老師，再仔細想想，還有沒有關於兇手的線索」

我無力地點點頭。

「有點困難…但我會再想想。大谷先生，你們有查到什麼嗎？」

「還在進行中」

大谷說得含糊不清。「總之，目前搜集到的證據不算少，我們會全力以赴。前島老帥今後也注意自身安全。據麻生老師供述，兇手現正焦急。想必最近會有所行動」

我會注意，我回答且特別低下頭示意。

「那…麻生老師犯下的罪怎麼處理？」

「這很讓人頭痛啊」

大谷露出懊惱地神情。「遭恐嚇進而犯下罪刑的情況下，或許可以酌情處理吧。然而，既已釐清寫下恐嚇信的人和殺害村橋老師的兇手為同一人的狀況下，對麻生來說，你就變成了大麻煩。如此一來，該怎麼對此做解釋就變得極為重要。

【原文】

「と言いますと?」

訊きながら私は、大谷の言いたいことが分かりかけていた。

「未必の故意が麻生先生の頭の中にあったかどうかということです。いや、この場合もう少し積極的なもの、つまり前島先生が死ねばいいという気持ちがはたらいたのではないかどう疑問が起きってきます。こうなると我々刑事では判断しようがない」

少なくとも私が死んでもかまわないと思っただろうな———少々暗い気持ちなりながら、私は大谷の言葉を聞いていた。

【訳文】

「怎說?」

這時，我漸漸明白了他的說法。

「重點在於麻生老師是否漠視事件的發生。這種情況下，法律上屬於比較積極的行為。總之，她是否抱有前島老師死也無妨的心態，這疑問會浮出檯面。事若至此，就不是我們刑警所能判斷的了」

她至少應該想過，我死了也無所謂吧——我邊聽著大谷的解釋，心情鬱悶了起來。